様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月　1 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520233
研究課題名（和文）ヴィクトリア朝小説と大衆演劇との歴史・文化的相関性の研究
研究課題名（英文）　A Study of Historical and Cultural Interrelations between Victorian Fiction and Popular Theatre

研究代表者
原　英一（HARA EIICHI）
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号：40106745

研究成果の概要（和文）：
本研究においては、ヴィクトリア朝小説と大衆演劇との深く有機的な結合関係を解明し、二つのジャンルが、17～19 世紀にわたる歴史・文化的文脈の中で、文化表現の媒体とし発展してきたことを明らかにした。ヴィクトリア朝大衆演劇の淵源を探求すると、イギリス・ルネサンス期の道徳劇、そこから派生した市民劇に行き着く。16 世紀後半から急速に発展してきた商業資本主義は、市民階級の台頭をもたらし、小説という新しいジャンルの誕生を促したのである。

研究成果の概要（英文）：
The study has made it clear that Victorian fiction and the popular theatre were at the culmination of the development of cultural history from the seventeenth to the nineteenth century by elucidating the profoundly dynamic correlations between the two genres. The origins of the Victorian popular theatre have been found to be in the morality plays and citizen drama of the English Renaissance. The rapid rise of commercial capitalism since the mid-sixteenth century has brought about the rise of the city merchants and their literature which finally crystallized as the English novel.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：イギリス小説・イギリス演劇・市民劇・大衆演劇・ブルジョア階級

１．研究開始当初の背景

ヴィクトリア朝演劇が、イギリス演劇研究において、従来から軽視されてきた理由は、イギリス演劇の歴史に明らかである。イギリス演劇はエリザベス朝・ジェイムズ朝の隆盛の後、劇場閉鎖期間を経て、王政復古期に復活を見たのであるが、18 世紀には急速に創作

面で貧困化した。しかし、Barbara Darby の Frances Burney 研究などで主張されているように、パフォーマンス面での演劇は大きく発展し、社会の広範囲な部分に浸透していった。

一方では、新しい文学ジャンルとして「小説」が Daniel Defoe、Samuel Richardson らによって創始されて、演劇にかわって文学の中での主要な地位を占めるようになった。大衆文化の基盤を形成していた演劇が同時代の文化、とりわけ主要ジャンルたる小説に影響しないはずはないと考えなければならない。事実、小説の始祖の一人として一般に見られているリチャードソンは、かつて Mark Kinkeed-Weekes が著書 *Samuel Richardson: Dramatic Novelist* において指摘したように「演劇的小説家」である。リチャードソンの書簡体形式の小説は、演劇的ダイアログ形式を元にして成立している。口語体で書かれた書簡が交錯することによって、すぐれて演劇的空間がそこに創出されているのである。一方、Charles Dickens の小説に演劇的要素が深く浸透していることは、現代批評の初期に Robert Garis, *The Dickens Theatre* によって指摘されて以来、自明の前提とされている。ディケンズ自身がいくつかの演劇作品を書いており、素人芝居をプロデュースし、自ら演じた。さらに、晩年に自作の朗読を行って、いわば「一人芝居」の名手として人気を博したことも周知の事実である。ディケンズにとって晩年の弟子でもあり盟友でもあった Wilkie Collins も、Robert Bulwer-Lytton、Charles Kingsley なども大衆的メロドラマと通底する作品を多くものしている。

研究代表者は、長年にわたってディケンズを中心としたヴィクトリア朝研究を行ってきたが、このジャンルに見られるこうした演劇との親近性に注目した。とくにディケンズがおそらく読んだことはなく、メンタリティーも大きく異なるはずのリチャードソンの小説がきわめて演劇的であることを発見して以来、ディケンズ研究の基盤としての演劇史研究が不可欠であることを痛感した。そこで 16 世紀中葉以降のイギリス演劇の研究会に参加し、そこで 20 世紀に至るまでの演劇作品を大量に渉猟していった。科学研究費補助金の交付を受けて行った研究の結果、小説というジャンルそのものの勃興と演劇との関係をかなりの程度明らかにすることに成功した。このような研究基盤に立脚して、18・19 世紀のイギリス演劇、とりわけディケンズ等の作家と直接に関連するヴィクトリア朝の大衆演劇と、同時代の小説との関係を有機的に解明することに進むことになった。本研究はこのような経緯により計画されることとなったものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、研究代表者のこれまでのディケンズ研究と演劇研究とを最終的に融合させることにより、19 世紀の大衆演劇と小説との深く有機的な結合関係を解明して、文化表現の媒体としての二つのジャンルの発展の様態とその相互関係とを、1600 年頃から 19 世紀後半に至るまでの約三世紀にわたる歴史・文化的文脈の中に位置づけることである。

ヴィクトリア朝演劇とディケンズなどの小説との関連については、一般的に認知されているにもかかわらず、現在なお研究が不十分である。その主たる原因は、小説研究と演劇研究とが分離していて、融合的な研究が行われることが少ないことに存する。研究者がそれぞれの領域にとらわれている結果、「演劇」か「小説」いずれかに焦点をあてることになり、演劇と大衆小説との密接な相関関係を融合的に把握することができない。さらに

は、小説と演劇の長大な歴史に関する基礎研究を欠いているため、ある時代に縛られた浅薄で展望のないものとなってしまっている。

研究代表者は過去十数年にわたって、科学研究費補助金の交付を受けて、16 世紀中葉から 20 世紀に至る膨大なイギリス演劇作品を研究してきた。本研究は、その集大成として、イギリス小説というジャンルの起源が 16 世紀以来の市民劇（大衆演劇）に存すること、二つのジャンルの有機的相互関係が 19 世紀に至るまで、存続し続けていることを明らかにすることを目的としている。

３．研究の方法

本研究においては、以下のような方法によって、研究を遂行した。

(1)　研究方法の概略

本研究は、およそ次のような手順により、進行させた。①18 世紀・19 世紀の演劇関係資料の収集と分析、②19 世紀初頭の代表的小説家 Walter Scott、Jane Austen の小説における「演劇」ないし「演劇的要素」の検討、③ゴシック小説の演劇化におけるジャンル転換のメカニズムの検討、④ヴィクトリア朝演劇及び大衆演芸に関する資料の収集と分析、⑤ディケンズ、コリンズ、ブルワー＝リットン、キングズリーおよび William Makepeace Thackeray、Anthony Trollope などの主要ヴィクトリア朝小説家と演劇との関係の解明、⑥Mary Elizabeth Braddon、George du Maurier などの大衆作家と演劇との関連の解明、⑦ヴィクトリア朝小説と大衆演劇との相関関係の理論構築である。

こうした研究遂行において、これまでの科研費による研究成果を応用して、16 世紀以来のイギリス演劇、とくに市民劇と小説の勃興との関係、小説における演劇的要素の探求を行うことを主眼とした。

(2)　研究環境の整備

研究代表者は平成 21 年 3 月に東北大学大学院文学研究科を辞し、同 4 月から東京女子大学現代教養学部に転出した。本研究は平成 21 年度から開始されたため、まず研究環境を新たに整備する必要があった。本研究では大量の文献資料を利用することを前提としているため、それらの資料の収集を行うのであるが、これらは可能なかぎり電子化資料を利用することにより、研究を効率化しなければならない。こうした作業のために必要なパソコン等のハードウェア、ソフトウェアを科学研究費補助金より購入し、研究環境の整備に努めた。

(3)　資料の収集

初年度においては、18 世紀から 19 世紀初頭にかけての演劇と小説の関係について研究を遂行した。18～19 世紀の小説で演劇との関連性がまず注目されるゴシック小説の演劇化に関する資料の収集を行った。大衆的ゴシック演劇の研究は、ヴィクトリア朝における演劇と小説の関係について多くの示唆を与えてくれるものと期待されたためである。続いて、ロマン主義時代の演劇、Walter Scott の小説のオペラ化、Jane Austen の小説と演劇との関連性の探究のための基礎資料の収集を行った。16 世紀以来の演劇資料及び 17 世紀後半からのロマンス文学、小説に関する資料収集も並行して行った。

実際の劇場の状況についても、ヴィクトリア朝のみならず、ルネサンス期以来の劇場について、幅広く資料の収集を行った。

収集された資料は紙媒体によるものと電子化テクストとに大別される。近年はインターネット上に多くの資料がアップロードされているが、かつては入手困難であったものも、ネット上で容易に閲覧またはダウンロードすることが可能になっている。それらの資

源を十分に利用して、資料の蓄積に努めた。

(4)　資料の分析

資料の収集を行いつつ、その分析を実施した。19 世紀小説と演劇との関係については、ウォルター・スコットとジェイン・オースティンを中心に分析した。スコットの小説は Donizetti の *Lucia di Lammermor* などのイタリアのオペラの題材となったことはよく知られている。スコットはイギリス国内においても舞台化されていて、とくに Arthur Sullivan の手になるものは、ミュージカルの先駆としての意義を持っている。ジェイン・オースティンも、*Mansfield Park* での素人芝居がかねてから注目されているところである。18 世紀のリチャードソン以降のドイツ、フランス等とイギリスとの間の演劇を軸とする文化的相互作用を理解することにより、イギリス演劇・小説の関係が明らかになることが予想されるので、この観点からのオースティン再検討を行った。

ディケンズ、サッカレー、トロロプ、コリンズなど、主要なヴィクトリア朝小説家の作品と演劇との関連についても再検討を行った。ヴィクトリア朝のロンドンでは種々雑多な「劇場」が存在した。そうした「劇場」で上演されるものは、正統的なオペラのみならず、すでに「芝居」という狭い定義の中にくくることはできない、ヴァラエティ・ショーというべきものであった。これらの大衆的な演劇・演芸が当時の小説にいかなる影響を与えていたのかを分析した。

４．研究成果

本研究は、研究代表者が過去約十年間にわたり、科学研究費補助金等の資金により実施してきた研究の一部であり、最終段階である。この十年間の研究は、小説と演劇という二つのジャンルの相関関係を明らかにし、とくにイギリス小説勃興の要因およびイギリス小説の本質を解明することが目的とされていた。本研究の研究成果も、継続して実施してきた研究の成果の一部として捉えられるべきものである。従って、研究成果は、本研究によって得られた短期的成果と、継続して行われてきた研究の長期的成果とに大別して記述する。

(1)　本研究で得られた成果

①　ヴィクトリア朝小説と大衆演劇との深く有機的な結合関係を解明した。

②　小説と演劇という二つのジャンルが、17～19 世紀にわたる歴史・文化的文脈の中で、文化表現の媒体とし発展してきたことを明らかにした。

③　ヴィクトリア朝大衆演劇の淵源は、イギリス・ルネサンス期の道徳劇、そこから派生した市民劇に行き着くことを証明した。

(2)　長期的研究により得られた成果

①　イギリス小説の起源はイギリス・ルネサンス期の市民劇であることを明らかにした。とくに、これまで軽視されてきた市民劇を未来のジャンルである小説という観点から分析すると、このサブジャンルの歴史的重要性が浮かび上がることを示した。

②　イギリス小説の誕生を最終的にもたらすのは、16 世紀後半から急速に発展してきた商業資本主義であることを明らかにした。商人階級は 17 世紀を通じて成長発展し、ついにはブルジョア階級として政治的経済的ヘゲモニーを確立するに至った。そのような商業資本主義文明の勃興の中における個人の問題を表現するための文化的手段が市民劇であった。しかし、ブルジョア階級の成立によって、文明と個人との矛盾についての新たな表現手段が求められることになり、小説が成立したのである。

③　女性が、その特有の社会的属性によって、

市民劇において重要な位置を占め、小説勃興の原動力となった。

④　ルネサンス期からのジャンルの生成発展を視野に入れて考察するならば、イギリス小説は Aphra Behn の散文作品 *Oroonoko* において誕生したものと断定することができる。

⑤　デフォー、リチャードソンの小説の多くが女性を主人公として、個人と社会との問題を追及したのは、市民劇からの系譜に沿ったものである。

16 世紀から 19 世紀までを対象として、小説と演劇との関係を追求した研究は他に類例がない。とくに小説勃興の研究において、画期的成果であり、イギリス小説の本質を明らかにしたという点でも、今後の演劇研究、小説研究に与えるインパクトは大きいと思われる。

研究代表者は、この研究成果を、今年秋に出版予定の単著『〈徒弟〉と〈女〉のイギリス文学－小説はいかに誕生したか』（仮題、岩波書店刊）により公表する。この単著の主要部分については、英文による論文として内外の学術誌に発表する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

１．　原　英一、「18・19 世紀小説とジェイムズ朝市民劇－イギリス近代文学における「徒弟」の系譜－」、『シルヴァン』、査読有、43・44 合併号、2012、pp.1-23.

２．　原　英一、「徒弟制度とジョージ・リロの『ロンドン商人』」、『日本ジョンソン協会年報』、査読無、No. 35、2011、pp. 24-28.

〔学会発表〕（計４件）

１．原　英一、「（招待講演）ウィットと反理性–ワイルドまでの系譜」、日本ワイルド協会第 36 回大会、2011 年 12 月 10 日、東京女子大学

２．原　英一、「（招待講演）ヴィクトリア朝のグリゼルダと反グリゼルダ」、日本ギャスケル協会第 23 回大会、2011 年 10 月 2 日、江戸川大学

３．原　英一・平野啓一郎・都甲幸治、「（特別シンポジウム）近代小説は死んだのか？ 小説の過去・現在・未来」、日本英文学会第 83 回全国大会、2011 年 5 月 22 日、北九州市立大学北方キャンパス

４．原　英一、「（招待講演）*Paradoxia Clarissima*：『クラリッサ』とイギリス小説の来し方、行く末」、日本英文学会関東支部 2010 年 5 月例会、2010 年 5 月 1 日、東京大学駒場キャンパス

〔図書〕（計２件）

１．原　英一（単著）、『〈徒弟〉と〈女〉のイギリス文学－小説はいかに誕生したか』(仮題)、岩波書店、現在校正中（2012 年 10 月刊行予定）、総ページ数約 300

２．河内恵子･松田隆美（編）、原英一ほか（執筆）、『ロンドン物語－メトロポリスを巡るイギリス文学の 700 年』（第 4 章「19 世紀前半－ディケンズの時代」執筆担当）、慶應義塾大学出版会、2011 年、総ページ数 236（執筆担当 pp.99-126）

６．研究組織

(1)研究代表者
原　英一（HARA EIICHI）
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号：40106745

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし